

共同研究 ● 梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用 (2011-2013)

本共同研究は、梅棹アーカイブズのうちモンゴル調査に関する資料を整理し、学術的に利用するとともに、現地に還元することを目的としている。最終年度は、フィールドノートの全容を把握するために、フィールドノートから転記されたローマ字カード約 5,000 枚に焦点をあてて、その整理に尽力した。

フィールドノートの概要

梅棹忠夫は、1944 年 5 月に、張家口に設立されたばかりの西北研究所に赴任して以来、第二次世界大戦の終結まで、現在の中国内蒙古自治区（以下、内モンゴルと記す）における牧畜社会の研究に従事した。まず、1944 年 6 月から 7 月にかけて当時の親王府の南牧場から北牧場までを移動し、モンゴル語と乗馬を身につけた。さらに 1944 年 9 月から 1945 年 2 月まで、東スニト旗を中心に現地調査を行なった（以下、本調査と称す）。このときの調査隊の移動には牛車が用いられ、梅棹自身はウマに乗り、冬期になるとラクダに乗りかえて調査を遂行した。その後、1945 年 6 月にタイプス旗に出向いた。

これらの調査行におけるフィールドノートは 0 番から 48 番までローマ数字で番号がつけられている。ただし、31 番と 32 番の 2 冊には Kato と記されているので、加藤泰安のノートであることはまちがいない。なお、33 番、34 番、35 番の 3 冊は実物が見あたらない。また、36 番から 46 番までの 11 冊は、漢字カタカナまじり文の筆跡などから、今西錦司の記したも

のであると知れる（写真 1 参照）。梅棹自身のフィールドノートとしては合計 33 冊が残されていることになる。

これらのうち特徴的なのは 22 番で、0 番から 21 番までの調査記録について梅棹自身がインデックス化したノートである（以下、インデックス・ノートと称す）。フィールドノートのリスト、調査行程表、聞き取りをした世帯の一覧、それらの世帯とフィールドノートとの関係などが整理されている。

また、最も番号の大きな 47 番と 48 番も特徴的である。これらのノートはそれぞれ 1944 年 3 月 21 日、2 月 23 日という日付で始まっており、内モンゴルへおもむくまえに記されたものである。いわば研究構想の記録といえよう。

宮本常一の調査ノートが刊行されているように（宮本 2005 など）、梅棹のフィールドノートも刊行されれば有益であることはまちがいない。しかし、それは本共同研究の範囲を明らかに越えている。本共同研究では、調査以前の構想が記されている上述の 2 冊のノートに着目し、共同研究メンバーである縄田浩志（秋田大学）がこれをデジタル入力した。そして、全フィールドノートの刊行に代えて、フィールドノートからカードに転記された資料を整理し、出版物として公開することとした。

ローマ字カードの概要

ローマ字カード（以下、カードと称す）とは、梅棹がフィールドノートの記載内容を項目別に解体し、A6 判のカードにタイプライターを用いてローマ字で記したものである。カード化作業はおおむね 1946 年 5 月に帰国してから行なわれたと思われる。

カードはすべて下線付きでタイトルが付されている（写真 2 参照）。まったく同じタイトルや同じようなタイトルのカードは、新聞紙などを用いた手製の小さな袋に入れてまとめられている。さらに、そのような小さな紙袋が複数まとめられており、仕切りカードがはさまれている。仕切りカードにもローマ字でタイトルが記されている（写真 3 参照）。

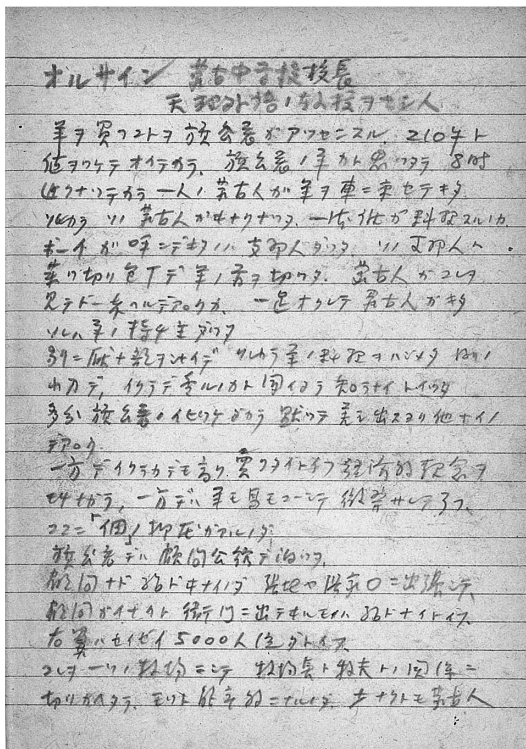


写真 1 今西の筆と思われるフィールドノート。

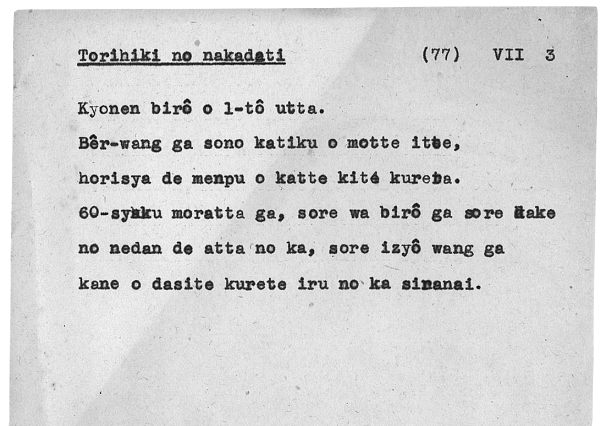


写真 2 ローマ字カードの一例。

各カードには、タイトルにつづいて、()内のアラビア数字と、ローマ数字とアラビア数字、という3つの数字が記載されていた。()内の数字は、聞き取り調査を行なった世帯の番号であり、インデックス・ノートに整理されている。ローマ数字はフィールドノートの番号である。また、3つめのアラビア数字は、そのノートのページ数をさす。



写真3 ローマ字カードの全容。

カード右上に記されたノート番号に、加藤のノート番号は登場しないので、加藤のノートは使われていないようである。一方、今西のノートからは、野生動物や気象、また僧侶のことなどが限定的に使われ、約260枚のカードになっており、全体の約5%をしめる。

ローマ字カードの整理

国立民族学博物館では梅棹アーカイブズ資料のうち比較的古いものからスキャン作業が始められている。モンゴル資料のなかではフィールドノートおよびカードがすでにスキャンを終了した。そこで、それらのデジタルデータを用いて整理を進めた。

まず、カードはそのままでは読みにくいので、漢字かなまじり文に転換した。カードには、転記のもととなったフィールドノートの番号とページ数が記載されているから、ローマ字のタイピングミスなどのために記載内容が不明な場合は、もとのノートにもどって確認することができた。地名や人名などが不明であれば、インデックス・ノートで確認することができた。地名、人名のほか、家畜の類別名称などがモンゴル語で表記されており、それらをローマ字からカタカナへ転記する方法については、共同研究メンバーの呉人恵(富山大学)の提案にもとづいて統一した。

紙袋と仕切りカードを用いた分類作業は、梅棹自身によってほぼ終了したのち、数十年間そのまま維持されてきたのではないと思われる。ただし、1946年に自宅へ、1974年に国立民族学博物館へ、1993年に館内の梅棹資料室へと、たびたび移転し、また逝去後も展示のためにこの資料を利用するなどしたため、カードの順序が動いた可能性も否定できない。今回の作業においては、カード項目の順序を一部移動させて整えた。

カード転記による断片化と集積化

フィールドノートは約100ページからなり、用いられたノートを約22冊として換算すると、総ページ数は約2,000ページあまりである。一方、それらが5,000枚近いカードに転記されているので、平均すると、1ページから2~3枚のカードに転記されたことになる。いずれにせよ、カード化とはそもそも情報を断片化することである。

例えば、「草・牧野」というタイトルをもつ仕切りカードのなかには、植物の現地名と学名を対応させた一連のカード群や、ゴビ、雨と草、野火、過放牧などのまとまりがある。これらのまとまりは、小さな紙袋に入っているが、紙袋には

タイトルがついていないので、整理にあたっては仮タイトルをつけた。大きなまとまり、すなわち仕切りカードだけでも、「草・牧野」のほか、「乾草と飼料」「乳製品」「オトル(分派的移動を意味するモンゴル語)」「狩猟」など、およそ50の項目がある。平均すると、1項目あたり約100枚のカードとなる。

例えば、「乾草と飼料」の場合には比較的多く、約180枚あり、それらが論文「草刈るモンゴル」に結実した(初出は1955年、梅棹1990に所収)。当該論文は、2種類の草刈りカマが植生のちがいに对应して分布していることから、草を刈る習慣が生態学的に合理的な伝統となっていることを指摘したものである。一種のクロスセクション分析(共時分析)であるといえよう。カードを用いて情報を断片化することによって異なる地点での情報が集積し、それらを再構成することによって地域の見取り図がえられるという体系的分析の成果である。

同様に、他の項目からも共時分析は可能である。例えば、冬営地について、「冬営地は夏営地のすぐそば、北のほう」といった簡単な記述ながら、17名のインフォーマントから25枚のカードが集積されている。それら25枚のカードは、フィールドノートの3~7、9、13、21番にわたっているので、総数として少ないものの、空間的には本調査の全域をほぼカバーしている。25枚のカードのうち、デリス *ders* (カヤの一種、学名は *Achnatherum splendens*) という植物に言及しているのは8枚あり、フィールドノートの3~7番に集中している。グンジャンダク砂漠をヌクセン川に沿って越えるときの記録である。そのあたりでは、地下水のある窪地に育つカヤのしげみが冬営地として利用されていることを如実に反映している、と見ることができよう。

このように、フィールドノートの断片化によって集積化されたデータが公開されれば、フィールドワークの概要が理解できるとともに、当時の生活誌の再現や現在との比較など、現地の研究者による学術的利用も大いに進むと期待される。

【参考文献】

- 梅棹忠夫 1990『モンゴル研究』(梅棹忠夫著作集第2巻) 東京:中央公論社。
- 小長谷有紀 2014「梅棹忠夫のモンゴル調査の記録と整理—フィールドノートからローマ字カードへ」ヨゼフ・クライナー編『日本とは何か—日本民族学の20世紀—鳥居龍蔵・澁澤敬三・梅棹忠夫・佐々木高明』東京堂出版。
- 小長谷有紀編 2014『梅棹忠夫のモンゴル調査ローマ字カード集』国立民族学博物館調査報告(編集中)。
- 宮本常一 2005『宮本常一農漁村探訪録 第1巻』周防大島:周防大島文化交流センター。

こながや ゆき

国立民族学博物館民族社会研究部教授。専門は文化人類学、モンゴル地域研究。著書に『モンゴル草原の生活世界』(朝日選書1996年)、『モンゴルの二十世紀』(中公叢書2004年)など。また2011年度の特別展「ウメサオタダオ展」で実行委員長をつとめ、『梅棹忠夫のことば』(河出書房新社2011年)、『梅棹忠夫の「人類の未来」』(勉誠出版2011年)など。